

幸福な時代

僕には一体、幸福というものが分からない
こんな愚かな者に何が出来よう

こんな憂鬱な男にどうして他人が愛せよう
こんな放浪人がどうして他人に愛を与え得よう
幸福な時代に僕は全くのゴミだ

しかし僕は飢えている、幸福に
しかも、いつの時代にもありふれた幸福に
疑念なくその幸福を抱き締めることが出来たなら
だが僕にとって幸福は限りない哀しみだ
ああ、これが単なる自虐であったなら

幸福は限りない哀しみだ
幼い子を抱く若い母の微笑と
その子をのぞき込む若い父の微笑とが
僕には何と痛々しい哀しみに見えることが
ああ、これは単なる羨望に過ぎないのか

幸福は限りない哀しみだ
だが、それが一体どうだと言うのだ
ただ、僕にはそれに堪える強さがないだけだ
幸福は限りない哀しみだ
しかし、それを抱き上げる人は美しい

けばけばしい絶望などにはきっぱり背を向け
さあ、僕も哀しみを抱き上げよう
ひっそりと・・・

(1982.6.13)